

## フランツ・リストと聖エリザベト —第1部、フランツ・リスト、その11—

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 粟 傷志・高田 昌実・上村 章  
田島 紘己  
加治木温泉病院 夏越 祥次  
東区・荒田支部 粟 隆志

### [はじめに]

リスト(1811-1886)が、マリー・デュプレシ(デュプレシス、本名：アルフォンシーヌ・ロゼ・プレシス、1824-1847.2.3.)に初めて会ったのは、45年11月と言われる。

2人が出会った時、マリーは21歳で、2人は急速に親しくなったが、その1年数ヶ月後、23歳のマリーは、肺結核で短い一生を終えた。マリーが死んだ部屋には、飾りのない額が掛けられていたと言われる。リストの肖像画である。

46年末より47年にリストは、チェコ、ハン

ガリー、ウクライナ(キーウ)そしてオスマントリ帝国のコンスタンチノープル…を演奏旅行していたが、そこにマリー・デュプレシの姿は無かった。

47年5月1日付けのランベルグからのマリー・ダグー(3人の子を儲け、44年にリストと別れた)宛のリストの手紙には、「かわいそうに、マリー・デュプレシが死んだ…。マリーは15ヶ月前に『どこでもいいから、あなたの好きな所に連れていって。お荷物にはならないから…』と言った。あなたには言わなかつたが、パリでは、この女性に何とも言えない

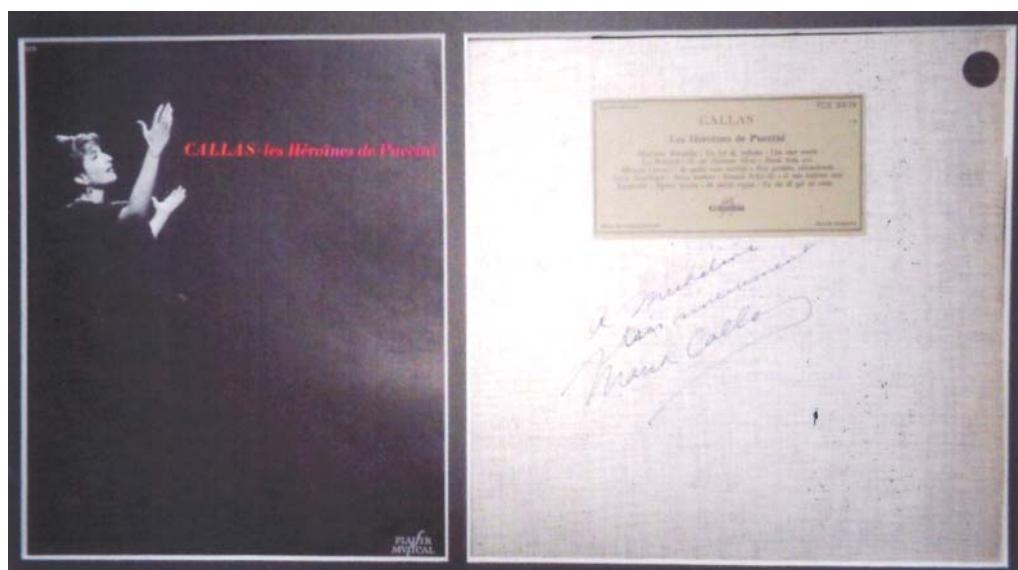


図100 オペラ史に不滅の足跡を残したカラス  
さようなら、過ぎ去った日の喜びの夢よ、……  
ああ、道に迷った女(traviata)の希望にほゝえんで；ああお許しを；……  
Addio, del passato bei sogni ridenti, Le rose del volto già sono pallenti;……  
Ah, della traviata sorridi al desio; A lei, deh, perdona; tu accoglila, o Dio!  
西洋音楽の歌詞の多くは、韻を踏んでいる事に注意。

魅力を感じていた。私は『コンスタンチノープルに連れて行こう』と答えたが、それも叶わなかった。彼女を思い出す度に、なぜか哀愁を帯びた響きが、私の心をかき乱す」と、書かれていた。

マリーはノルマンディに生まれ、不幸な少女時代を送った後、15歳でパリに出た。産業革命で繁栄と享楽を謳歌していた華の都では、貧しい女性の一部は、美貌と教養を武器に、裕福な名士をパトロンにして、逞しく人生を生きたのである。マリーもその一人であった(図101)。

46年2月(22歳)、マリーはペルゴー伯爵とロンドンで結婚(同年1月発行のパスポートあり)。短期間ではあるが、伯爵夫人となった。間もなく、2人は不仲になり別れたが、マリーは年金を貰わなかった。伯爵がそれほど裕福でなかったか、他に理由があったのかかもしれない。

多くの著名な芸術家などが眠る、モンマルトル墓地のマリーの大理石の墓は、ペルゴー伯爵が建てたものである。



図101 マリーに最も近いと言われる肖像画  
瓜実顔、黒く大きい瞳、柳眉、すっきり通った鼻筋、カールした長い黒髪、対称的に白い肌...。胸には白い椿...。  
(エデュアル・ヴィエノー画)

文豪アレキサンドル・デュマ・ペールの息子、デュマ・フィス(1824-95)は、ペールとお針子の母、カトリーヌ・ラベとの間に生まれた私生児(31年に認知)であった。

デュマ・フィスがマリー・デュプレシと親しかったのは、44年9月-45年8月と言われる。彼は私生児として生まれたため、マリーと通ずるものがあったのかもしれない。

いずれにせよ、マリーが極めて教養豊かで、知的で気品があり、魅力的な美貌の女性であった事は、当時のパリの衆人の認める所であった。

今回は、図29(医報第61巻第2号p47参照)の「リストの思い出」の続きとして、ロッシーニとアレキサンドル・デュマについて述べるが、後者に関しては、リストとも関係のある、デュマ・フィスの「椿姫」について主に述べる。

### [5] ロッシーニ(1792-1868)

図29の「リストの思い出」でパガニーニの右に立ち、肩に手を置いているのが、伊の作曲家ロッシーニである。

24歳で「セヴィリアの理髪師」で名声を博した彼は、名ソプラノ、イザベラ・コルブランと結婚。生涯に39曲のオペラを遺した。

32歳でパリに移り、パリのイタリア座の音楽監督に就任。翌年、仏国王シャルル10世の即位に際し、記念の「ランスへの旅」を作曲し、国王に献呈。これにより終生年金を得る事になった。更に翌年、オペラ座にも進出し、「コリントの包囲」を初演した。いずれも意欲作である。

44歳でイタリアに帰国。イザベラの死の翌年、54歳の時に、マリーと同様の人生を送り、バルザックとも親密であったオランプ・ペリシエと再婚した。

63歳の時、再びパリに戻り、自宅サロンで毎週、「音楽の夜会」を催した。常連にリスト、ヴェルディ、グノーラがいた。



図102 ロッシーニの「セヴィリアの理髪師」と「アリア集」  
テレサ・ベルガンザとルチア・ヴァレンティニ・テラーニ

リストは「コリントの包囲」他、多くの曲をピアノ編曲した。ロッシーニは76歳で死去。死後「セヴィリア」「チェネレントラ」他数曲以外は急速に忘れ去られたが、1960年代末から開始された全集出版や、アバドによる記念碑的「ランスへの旅」の約150年ぶりの再上演など（ロッシーニ・ルネッサンス）により、多数の作品が復活した。

図102は、テレサ・ベルガンザの1964年の「セヴィリア」の名盤とベルガンザおよびルチア・ヴァレンティニ・テラーニのアリア集である。

図103の左は、クラウディオ・アバドのペザロに於る「ランスへの旅」の復活上演である（84）。

アバドは「多彩なベル・カントの歌唱をこなせる歌手陣を、揃える事が難しいという理由から、舞台にかけられる事が無かった…」

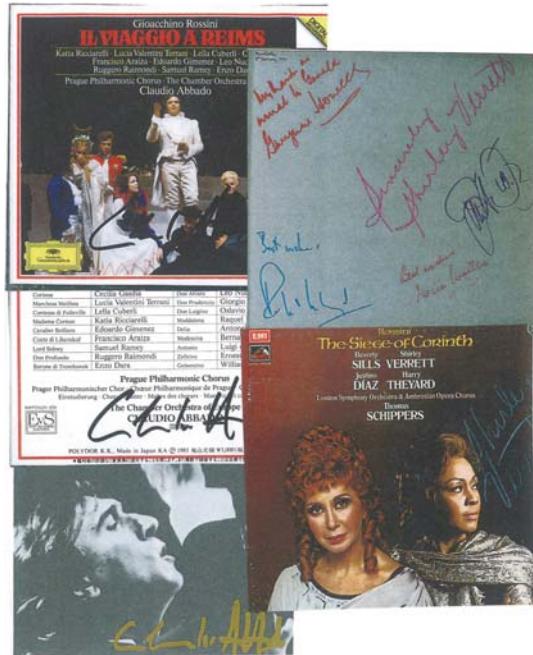


図103 ロッシーニの「ランスへの旅」（左）と「コリントの包囲」（右）  
左は、セシリヤ・ガスディア、ルチア・ヴァレンティニ・テラーニら豪華配役。アバドの意気込みも強い。右もビヴァリー・シルス、シャーリー・ヴァーレッドなど豪華配役。

と述べ、このオペラの上演とその成功を熱く語っている。配役も豪華で、配役表までも含めた3ヶ所のサインから、この上演にかけた彼の情熱、意気込みを感じ取れる事ができる。

同図右の「コリントの包囲」も、75年の名演。歌手達のサインも嬉しい。

## [6] アレキサンドル・デュマ、父と息子

### (1) デュマ・ペール（父）(1802-1870)

図29の「リストの思い出」でジョルジュ・サンドの隣がペールである。

絵画の中のユゴーやミュッセらとも親しく、古典演劇にかわるロマン派演劇の作家、小説家として活躍。当時急伸した大衆新聞の連載でも読者を増やした。

冒險活劇小説「三銃士」、復讐小説「モンテ・クリスト伯（巖窟王）」などで大衆の人気を博した。

## (2) デュマ・フィス(息子)(1824-1895)

デュマ・フィスは、20歳の時に、金持ちをパトロンにもつマリー・デュプレシと恋に落ちた。マリーは、1847年(23歳)に肺結核で死亡。

デュマ・フィスは、48年に2人の思い出を、長編小説「椿姫」として書いたが、これが、不朽の悲恋小説となった。

図104は、デュマ父、息子の代表作のイカールによるエッチング「ダルタニアン」と「椿姫」である。

父と息子、各々の性格、作品の特徴をよくとらえている。

## (3) 「椿姫」

デュマ・フィスは、マリーとの体験をもとに、48年に「椿姫」を書いた。もちろん全体の構成などはフィクションである。

小説では、マリーは『マルグリット・ゴーティエ』、アレキサンドル・デュマ・フィスは『アルマン・デュヴァル』(同じ頭文字A.D.となっている(図105、106)。

「椿姫」の名は、マルグリットが通う劇場



図104 デュマ、父と息子の代表作  
右:父の「ダルタニアン」(1931刷)  
左:息子の「椿姫、過ぎ去りし日」(1938刷)  
(イカールによるエッチング)



図105 豪華な「椿姫」の舞台  
マリア・カラスとアルフレド・クラウス  
(EMI: Maria Callas, Ses Récitals, 54-69)

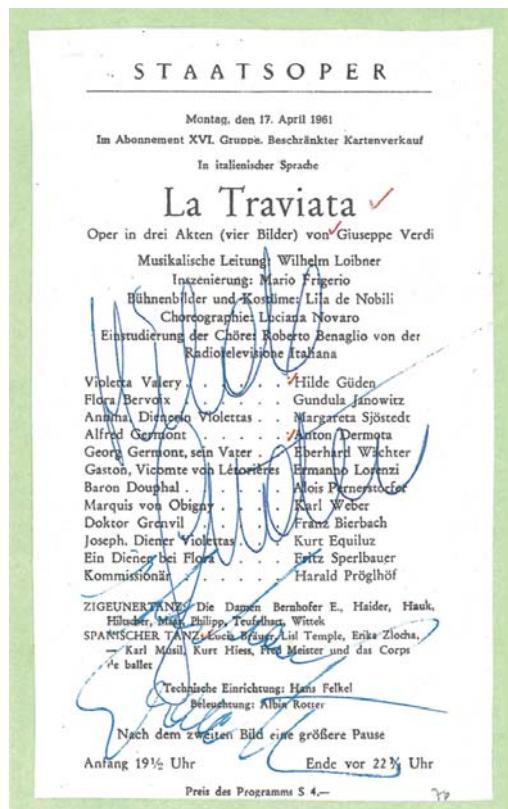


図106 ヴィーンでの「椿姫」のプログラム(1961)  
ヴィーンの名ソプラノ、ヒルデ・ギューデンとグラン  
ドゥラ・ヤノヴィツ。当時の国立歌劇場のプログラム  
は、小さい紙切のそ分けないものだった。

## [隨筆・その他]

の桟敷に、月の25日は白椿、5日は赤椿の花束を置いていた事による。肖像画では、一輪の白椿が胸を飾っている（咳込まぬよう、香りのしない椿であった）。

小説は物価高の現代でも、450頁の文庫本が、たった630円で買えるので、その事を申し添えておきたい。

小説では、アルマンは、他人の忠告に耳をかさず、我を通す利己的で嫉妬深く、猜疑心が強く、執念深い、世間知らずの単純な若者に、父親もまた世間体を気にし、息子の将来を気にするあまり、マルグリットのアルマンに寄せる女心を巧みに利用して、息子と別れさせようとする構図で描かれている。

一方、マルグリットはそれに耐え、涙ながらに別れを決意するという、メロドラマ仕立てになっている。

アルマンが賭けで稼ぐなど、話の展開に難点はあるが、一途で分別のないアルマンと常識的な父親を描く事により、ヒロインの悲劇性を一層増幅させ、読者の感涙を誘う、デュマ・フィスの小説家としての語り口は、なかなかのものと言うべきであろう。

(付録) 小説「椿姫」にみるロマン派時代のフラン (franc) の貨幣価値 (単位略)

ショパンのレッスン料、3千/月、1曲の作曲料5百、前奏曲2千、ジェーン・スターリングが晩年のショパンに贈った生活費2万5千。リストがカロリーネに残した遺産、約22万。これらは、現代ではどれ位の価値だろう。

- ・天金の小説「マノン・レスコー」、1冊10
- ・田舎の3室の家賃、60/月
- ・田舎の庭付3階建の邸宅の家賃、2千/月
- ・2頭立の箱馬車、1万
- ・アルマンとマルグリットが観劇して贅沢な夕食をとる、80~100/日
- ・社交界に出入り可能な若者の年収、2~3万
- ・アルマンの年収、8千。父の年収、4万

・マルグリットの年間支出、10万。彼女のダイヤのイヤリングのペアー、8千-1万

・マルグリットの若いパトロン、N伯爵の年収、20万

・マルグリットに年10万のお金を出せる人の年収、多分70~80万以上

以上から、1フラン 千円位と換算できる。

ショパンは、年収4千万円のお金持ちだった。晩年のショパンの生活費に、ジェーン(図58)が贈ったのは、2千5百万円。アルマンの年収は8百万円、マルグリットの支出は1億円(マルグリットには、いくらでも出してくれる大金持の老公爵がいた)。マルグリットがたった一人の身内(妹)に残した遺産は、5千万円であった。

当時の貴族が、贅沢な生活をしていた事が分かる。ヴァイマル時代以後、膨大な数の弟子から全くレッスン料をとらなかったリストの後半生が、比較的質素だった事も分かる。

デルフィヌ・ポツカ(図60)は、ポツキと離婚する時、10万の年金(慰謝料)を確保し、パリでエルハルト伯爵、オルレアン公爵...と優雅な出戻り生活を送っていたが、マリーも、ペルゴー伯爵などからこのような年金をもらっていたら、彼女の人生も変わっていたんだろう。

図58、図60...医報第61巻第5号に掲載

(付録) 駆け足でみる、ヴェルディ(1813-1901)

のオペラ「椿姫」の録音

ヴェルディは、デュマ・フィスの小説を基にした台本から、1853年にオペラ「椿姫」を作曲(同年「イル・トロヴァトーレ」も作曲)。

ここでは、タイトルは、「椿姫」から「ラ・トラヴィアータ(道を踏み外した女)」に変わり、マルグリット・ゴーティエは『ヴィオレッタ(すみれ)・ヴァレリー』に、アルマン・デュヴァルは『アルフレード・ジェルモン』に変更され、ヴィオレッタの死の場面も



図107 CDで聴く「椿姫」

CDでは、膨大な数の演奏が聴ける。

トスカニーニとルチア・アルバネーゼ（1946）、アルトニエッタ・ステッラ、エディタ・グルベローヴァ。

変更されている。

この最も多く演奏されるオペラは、1946年の大指揮者トスカニーニの録音以来、世界的に名声を得た、大部分のソプラノの歌手が録音を残している（図107）。

ただ心理描写、感情表現の重要なこのオペラの録音に関しては、マリア・カラスのヴィオレッタに勝るものは無い。

メキシコ、イタリア、ポルトガル、イギリスで遺されたカラスの「全曲録音盤」は通常7つあり、年代と指揮者を示すと、

1951, デ・ファブリティス	1952, ムニヤーイ
1953, サンティーニ	1955, ジュリーニ
1956, ジュリーニ	1958, ギオーネ
1958, レッシーニョである（図108, 109）	

1950-60年代は、メジャー・レベルのレコード会社が、鎬を削っていた。花形はオペラであった。ベル・カント・オペラでカラスに対抗できるソプラノはいなかった（図110, 111）。

契約上の問題で、「椿姫」でカラスと共に演



図108 カラスの「椿姫」のCD

カラスの「椿姫」は、全てCDで揃うはずだが、実際は困難。



図109 カラスの「椿姫」のLP

カラスの「椿姫」をLPで全て聞く事は、非常に困難。左中は、通常のディスクグラフィーがない、1952年6月3日のメキシコ市のライブ（インタビュー入りプライベート版）。右中のみグレベローヴァ版。



図110 セラフィンとステッラの「椿姫」

カラスに対抗できるのは、唯一、カラスを育てた名指揮者セラフィンのみであった。スカラ座のアントニエッタ・ステッラと(1956)。



図112 華やかな社交界のカラスとヴィオレッタを演ずるカラス

左：アラン・ドロン、右：リズ・テーラーとオナシス。カラスの晩年はヴィオレッタ同様、寂しかったに違いない。時は流れ、歴史は形を変えて繰り返す。

(Attila Csampai: CALLAS, SCHIRMER/MOSEL, 1993. and EMI: Ses Recitars, 54-69)



図111 セラフィンとステッラ、コソットの「イル・トロヴァトーレ」(1962)

ベル・カント・オペラでカラスに対抗するセラフィンとミラノ・スカラ座。ドイチェ・グラモフォンの豪華なレコード箱と付属の解説書。

できなかった、カラスの師で名指揮者のセラフィンとミラノ・スカラ座が頑張っていた。

ケネディ元大統領未亡人ジャクリーンとの争いに敗れたカラスは、莫大な音楽遺産を残し、1977年、パリのアパートで一人寂しく52歳

の生涯を終えた(図112)。それが人生…。

タールベルグは「オペラ『ラ・トラヴィアータ』によるコンサート用大幻想曲、Op78」を作曲したが、マリーの最後の恋人リストによる「椿姫」のピアノ編曲は無い。

(つづく)